

戯曲

デ
イ
オ
ニ
ユ
ソ
ス

—闇の神性—

III

正
道

SEIDOU

目次

ディオニュソス 闇の神性III	
全体の目次	3
第9章 虚無への降下	
登場人物	5
大地の子宮	6
闇から闇への降下	8
子供たちとの交わり	10
ザグレウス神話の再現	13
第10章 無からの創造	
登場人物	17
ゼウスの腹中	17
闇の真理の開示	19
夜空	22
第11章 ヘルメス・トリスメギストス	
登場人物	25
山の頂上	25
教示を終えて	27
第12章 曙光	
登場人物	30

ディオニュソス 闇の神性Ⅲ

全体の目次

- 第1章 ザグレウス
- 第2章 セメレー
- 第3章 小鹿と葡萄酒
- 第4章 イノーとアタマース
- 第5章 ティーシポネ
- 第6章 イルカになった水夫たち
- 第7章 シレノスとの再会
- 第8章 大地母神キュベレー
- 第9章 虚無への降下
- 第10章 無からの創造
- 第11章 ヘルメス・トリスメギストス
- 第12章 曙光

第9章 虚無への降下

登場人物

キュベレー フリギュアの大地母神。今回は声だけではなく、その姿も現すことになる。胸と腰の大きさが強調された、ふくよかな体つきの女神である。

ディオニュソス われらが主人公も、キュベレーの保護下で、その意識を取り戻すことになる。

声 ある偉大な神の声。

子供たち 大地母神の息子（恋人）たち。四歳ぐらいの姿。三人登場するのだが、とくべつ個性を発揮する訳ではないので、単に「子供たち」と表記することにする。あえて名前を掲げるとすれば、アッティス、アドニス、パールとなるだろう。

☆アッティス キュベレーの恋人。

☆アドニス アフロディーテ（美の女神）の恋人。

☆パール アシュタロテの子供。このパール・アシュタロテはフェニキアの神々であり、旧約聖書では邪神とされている。しかし実際には「死と再生」を表現している農耕神であった。

ピロテス ティターン（巨神）神族の一柱。愛欲の神。

モモス ティターン神族の一柱。非難の神。

タナトス ティターン神族の一柱。死の神。これらティターンたちは過去の幻影である。

ゼウス オリュンボス神族の最高神。創造神でもある。

大地の子宮

あたりは完全な暗闇に包まれている。その暗闇のなかに、ディオニュソスとキュベレーの姿が浮かび上がる。ディオニュソスはまだ意識を失っている。キュベレーは初めて、女神としての姿を現すことになる。

キュベレー 起きなさい、ディオニュソス、ディオニュソス、ここにはあなたを傷つけるものは何もないわ。

〔ディオニュソス、起きる〕

ディオニュソス あなたは……

キュベレー 私はキュベレー、あなたの門。あなたの本質が現れる場所へと通じる門。あなたは私をくぐったのよ。

ディオニュソス 本質ですって？ 私の本質とは何です？

キュベレー それは私が答えることではありません。あなた自身が、これからそれを見つけに行くのですよ。ここはあなたの旅路の、その出発点にあたります。

ディオニュソス では、ここは一体どこなのです。何なのです。

キュベレー そうですね、この場所は「大地の子宮」とでも呼ぶべきでしょうか。

ディオニュソス 子宮……お母さんのお腹の中ですか。

キュベレー ええ。あなたは傷ついて弱っていて、今とても危険な心の状態にあります。けれど、この温かな暗闇は、私という母神がつくり出している子宮のような保護地なので、まことに柔らかな包容性に満ち満ちている。だから弱っているあなたでも、こうしてまともでいることが出来るのです。

ディオニュソス たしかにそうです。大きな優しさに、心が支えられているような感じがします。

キュベレー そうでしょうね。でも、ここから一步でも出たら最後、あなたの心の傷は、ふたたび外気に剥き出しになってしまいます。あなたはその痛みに耐えられなくて、またしても狂気のなかに閉じこもってしまうことでしょう。

ディオニュソス ……そうかもしれない。

キュベレー だからあなたは、これから自分本来の居場所まで降りて行って、そこで自分の本質を悟らなければなりません。

ディオニュソス 本質……ですか。

キュベレー あなたの本質は、狂気など一瞬にして払ってしまうほどの強大な神性です。ですから、それさえ悟ってしまえば、あなたの心は、今とは比べ物にならないほど強くなるでしょう。そして、そうやって強くなってから、ふたたび私をくぐって、外気に触れればいいのです。

ディオニュソス でも辺り一面ただ暗いだけで、僕には、自分がどこへ向かっていけばいいのか、見当もつけられません。

キュベレー もちろんそうでしょう。だから「声」があなたを案内します。私はこれ以上深いところまでは行けませんから、ここであなたを待っています。

ディオニュソス 声とは何です。どうしてあなたは来られないのですか。僕を守ってくれないのですか。

キュベレー そんなにムキにならないで。不安なのは分かりますが、仕方がないことなのです。私は大地の神ですが、大地とは、地上と地下を結びつける門でしかないのですから。

ディオニュソス ……そういえば、あなたは初めから自分を「門」だと。

キュベレー そう。私の手がとどく地下世界は、せいぜい草木の根が伸びているあたりまで。あるいは、有機的な黒い土が堆積しているあたりまで。つまり土と生命が結びついていることが、大地の定義なのです。だからそれより深い、無機的で鉱物的な土の世界へは、私はどうしても降りることが出来ません。

ディオニュソス たしかに、こうして実際にあなたに包まれていると、その言っている事がよく分かります。ここは腐葉土のような温かくていい匂いがします。それは決して、冷たい土くれの匂いなどではありません。

キュベレー ですがディオニュソス、あなたが行くべき場所は、深い深い、いわば永久に深い地下なのです。無機的で命の匂いがしない、そうした乾いた土くれの世界なのです。

ディオニュソス そんなところまで降りて行かなければならないのですか。想像しただけで怖くなってしまいます。

声 大丈夫だ。そこまでの道のりでは、キュベレーに代わって、私がお前を支えてやろう。

ディオニュソス 男の人の声だ。

声 いかにも男だ。なにしろ「そこ」に行けるのは男だけなのだからな。そこは性差を超えた抽象の世界だが、そこまで辿り着けるのは男だけなのだ。

ディオニュソス あなたは誰ですか。

声 まだ名を明かすことは出来ない。お前が真のお前になったとき、その時にわが名を告げることしよう。では来るがよい。私の導きのもとに。

ディオニュソス では……行きますね、キュベレーさま。

キュベレー お行きなさい。そして大地の奥底で、地下の底の底で、あなたの輝かしい精を放ちなさい。きつとその精が大地にも届いて、私に新しい力を与えてくれるはずだ。

闇から闇への降下

声 に導かれて、暗闇の階段を降りてゆくディオニュソス。

声 地下には冥府があるが、その冥府の脇道を、私たちは降りている。ハデスにも気づかれず、私たちはガイア（地球）の中心まで降りてゆくのだ。

ディオニュソス 闇の中にあっては、どれぐらい時間が流れているのかが分かりません。ええ、もう何日もこうして階段を降りて行っているような気がします。声よ、僕はもっと降りていかななくてはならな

いのですか。

声 ずいぶんと不安になってきたようだな。だが安心してよい。もうそろそろ目的の場所に近づいてきたはずだ。その証拠に……ディオニュソス、あそこを見るがいい。

ディオニュソス 誰かいる。

「依然として辺りは暗闇であるが、そこに三人の子供たちの姿が見える。何かに照らされている訳ではないが、その姿は実に明瞭である。子供たちは闇に浮かびながら、互いにそっぽを向き合っている」

声 デイオニュソス、お前の仲間たちだ。

ディオニュソス 仲間ですって？

声 あるいは「お前に似た者たち」と言ったほうが正確かもしれん。彼らは大地母神の息子たちなのだ。

ディオニュソス 大地母神の息子？

声 そうだ。彼らは晩秋になると、母神に呑み込まれて、こうして地下の世界へと降りてくる。そして春になると、今度はまた、母神の力によって、地上に還ってゆくのだ。

〔声とディオニュソスの存在に気づき、子供たちが話しかけてくる〕

子供たち 一人目 つまり僕たちは種の象徴なんだ。

二人目 秋に実った種は大地に蒔かれて、そうして冬のあいだ、地下でじっと隠れているでしょう。

三人目 だけど、そうやって地下に消えた種も、春になると萌芽として地上に現れるんだよ。

声 つまり「冬の枯死と春の甦り」あるいは「死と再生」が、大地母神とその息子たちに特有のドラマなのだ。今は冬が始まろうとしている頃だからな、この子供たちは、地上の者たちからすれば死んでいる状態、すなわち地下に消えている状態にあるのだよ。

ディオニュソス それでここに……そういえば、僕もキュベレーさまという門をくぐって地下に降りてきたんですよ。

声 そうだな。

ディオニュソス 僕が彼らに似た者ならば、僕もまた、キュベレーさまの力によって、地上に還っていくことになるのですか。

声（少し怒りぎみに）違う、断じて違う。この子たちとお前は似ているだけだ。お前たちは似て非なる者らなのだ。

ディオニュソス はい。

声 この子たちは神格が低いので、母神（大地の再生力）によって蘇らせられるばかりだが、お前は違う。大いなる神であるお前は、この地下において、かの大地母神をも「蘇らせる」ほどの、究極の「死と再生」を演じることになるのだ。

ディオニュソス 究極の死と再生……

声 つまり「無からの創造」だ。しかし口で言っても始まらない。それよりもディオニュソス、お前はここで、この子供たちと交わるがいい。彼らとの交わりは、お前が自分自身の本質を見つけるための、最良の手助けとなるだろう。

子供たちとの交わり

ディオニュソスと大地母神の息子たちとの対話

ディオニュソス（子供たちに）君たちは冬のあいだ、ここで何をしているの。

子供たち 一人目「ここ」には僕たち、今日初めて来たんだよ。

二人目 こんな深いところまで来たことなんてない。

三人目 落とし穴を踏んだみたい、トーンとここまで落ちてきたんだ。

ディオニュソス あれ、そうなの？

声（ディオニュソスに）お前が悟るための手伝いをしてもらおうと思ってな、この子らには、いつもより深い地下まで来てもらった。

子供たち 一人目 だって、こんなに地中深くに、種を蒔く人なんていないでしょう。

二人目 僕らにとつての地下は、あの大地の子宮のことなんだよ。

三人目 あーあ、あの大地の温もりが、軟らかな土の匂いが懐かしいな。

ディオニュソス ごめんね、僕のせいで。

子供たち 一人目 とにかくここは無機的で……それで寒くて寂しいんだ。

二人目 だから、みんなと一つに重なりたいと思ってる。

三人目 たとえ今日はじめて会った仲だとしてもね。

ディオニュソス 一つになりたいのに、そうやって、そっぽを向き合っているのかい？

子供たち 一人目 だって何も見えないし、どうすればいいか分からないんだもん。

二人目 知ってるなら教えてよ。お兄ちゃんは目が利くみたいだし。

三人目 そうだよ。お兄ちゃんも、こっちに来てよ。

ディオニュソス じゃあ輪になるうか。本当は、僕も寂しいんだ。

〔ディオニュソス、子供たちに混ざる〕

子供たち 一人目 でも暗闇には、なんの基点もなくて。

二人目 どこを向けば輪を作れるのかも分かんない。

三人目 それからこそ僕らは、そっぽを向き合ってたんだ。

ディオニュソス ああ、そうか……では声よ、なにか標になるようなものを頂けませんか。基点として置けるようなものを。それを囲むことで、僕らが輪になれるようなものを。

声 では柱を立てることにしよう。これでよいか。

〔淡く光る柱が立って、子供たちとディオニュソスが、皆その柱のほうを向くことになる。すると自然に、人の輪が出来る〕

ディオニュソス これでどうだろう。ほら、みんなで柱を見てるから、ちゃんと輪になってる。

子供たち 一人目 本当だね、輪になってる。

二人目 輪になってるから、一人じゃない。

三人目 でも何か変だな。

ディオニュソス 何が変だって？

子供たち 一人目 分かった、柱が太すぎるんだ。

二人目 これじゃ正面にいる子の顔も見えないよ。

三人目 この柱、もっと細くならないのかな。

ディオニュソス 声よ、細くなりませんか。

声 こうか。

〔ディオニュソスの要望に応じて柱が細くなる。もとの太さの半分ぐらい〕

子供たち 一人目 グンと細くなったね。

二人目 これで僕たちは、一つになれたのかな。

三人目 そうさ、僕たちは同じものを見てるんだもの。

ディオニュソス ああそうだね。皆で一つのものを見ていると思うと寂しくないね。

子供たち 一人目 でも、僕が見てる柱の疵って、ほかの皆も見えてるの？ ——（他の二人）見えない。

二人目 僕が見てるこの汚れは？ ——（他の二人）見えない。

三人目 じゃあ、僕が見てる小さな穴ぼこは？ ——（他の二人）見えない。

ディオニュソス 同じ柱を見てるはずなんだけど……

子供たち 一人目 でも同じじゃないんだ。たとえ同じ柱だとしても。

二人目 だってみんな、他の子が見えない部分ばかり見てるんだもの。

三人目 これじゃ僕ら、とても一つのものを見てるとは言えないよね。

ディオニュソス じゃあ、どうすればいいんだろう。柱がもっと細くなればいいのかな。

〔柱、今度はペンぐらいに細くなる〕

ディオニュソス 細くなった。そして、さっきより細くなったぶん、ほら「自分には見えるけど他の子

には見えない」っていう部分も小さくなったよね。

子供たち 一人目 うん。さっきよりも同じものを見てるのかもしれない。

二人目 でも、やっぱり柱の向こう側は見えないよ。

三人目 もっともっと細くならないのかな。

ディオニュソス やってみようか。

〔柱、糸のように細くなる〕

ディオニュソス どうだい？

子供たち 一人目 これなら同じものを見てるのかな。

二人目 ……うん。でもたぶん、どんなに細くしたって同じことなんだよ。

三人目 うん。結局、柱の反対側は見えてないはずだからね。

ディオニュソス それなら、どこまで細くしたって同じことだよ。要するに、君らが望むものなんて、ありはしないんだ。

子供たち 一人目 いや、あるんだよ。

二人目 それを僕らが教えてあげる。

三人目 こうやってね。

〔突如として、子供たちの体が膨れ上がる。そして、それぞれティターン神族の、ピロテス、モモス、タナトスの姿へと変わる〕

ザグレウス神話の再現

第1章の陰惨な場面が、ここで再現されることになる。ただし背景は相変わらず暗闇である。

ディオニュソス なに、一体どうなってるの？

ピロテス 懐かしいぞザグレウス。生まれ変わってもお前は美しいのだな。

〔ピロテス、ディオニュソスの体にしがみつく〕

ディオニュロス はなせ！

モモス そして、今なお憎らしい。もういちど八つ裂きにしてやりたいほどにも。

〔モモス、ディオニュソスの両足を引っ張る〕

ディオニュロス 痛い！ やめろ！

タナトス やめるものか。ふたたびお前を殺せる喜びに、私の冷たい血も滾る。

〔ティターンたち、ディオニュソスの体を八つ裂きにしながら、同時にその体を喰ってゆく〕

ディオニュロス やめて！ 誰か助けて！

声 ここには誰もいない。

ディオニュロス ぎ、ぎぎぎぎぎ……

タナトス もうすぐ死ぬ。

モモス どうやら死んだ。

ピロテス 快楽はいつも短い。

〔ディオニュソスの死が確認されると、ティターンたちが三人の子供たちの姿へと戻る。ディオニュソスの体は、ほぼ完全に喰われたため、その場には心臓だけが残っている〕

子供たち 一人目 心臓は残ったね。

二人目 ほかは全部食べ尽くせたのね。

三人目 これだけは食べられなかったね。

〔子供たちの背後の暗闇から、ゆっくりとゼウスが姿を現す〕

ゼウス 子供たちよ。この心臓だが、私が貰っても構わないかね。

子供たち 一人目 うん、いいよ。

二人目 誰だか知らないけどいいよ。

三人目 どうせ僕らには食べられないしね。

〔ゼウス、子供たちから心臓を受け取る〕

ゼウス デイオニュソスよ、お前の心臓を呑み込めるのは、やはりこの私だけなのだ。

〔ゼウス、心臓を呑み込む〕

声 来たかゼウスよ。

ゼウス ええ。今はデイオニュソスがその本質を露わにする時ですから。私に包まれていなければ、あるいはアポロンと結びつかなければ、デイオニュソスの本質は、単なる無に過ぎません。それはあなたもご存じのほずです。

声 だが、お前が呑み込み、お前の腹のなかで、デイオニュソスが己の本質を見つけたならば、それは「無からの創造」となる。創造神にして最高神ゼウスよ、そうだな。

ゼウス そうです。だから来たのです。

声 おお、ようやくこの日が訪れた。私も大いに待ったが、それも今日でカタがつく。ではゼウス、ともに最後の仕上げをしようではないか。

ゼウス ええ。それでは、一緒に私の腹のなかに行きましょう。

第10章 無からの創造

登場人物

ディオニュソス ティターンたちに体を喰われた我らが主人公は、いまや心臓だけの状態になってしまった。

声 ある偉大な神の声

子供たち 大地母神の息子（恋人）たち。四歳ぐらいの姿。アッティス、アドニス、パール。

ゼウス オリュンポスの最高神。創造神。

ゼウスの腹中

暗いが、明かりに照らされれば赤く見えるだろう。それは内蔵の色としての赤である。ひとまず暗がりにはディオニュソスの心臓が浮かんでいる。

声（ディオニュソスに） 八つ裂きにされ、喰われ……つまり存在を打ち消され、打ち消され、それでもなお残ったお前の心臓。この心臓こそが、ディオニュソス、お前の本質に他ならない。

ディオニュソス（心臓） 声が聞こえる。

声 今、お前がすべてを知るときだからな。心臓だけになったとはいえ、お前はすべての出来事を知ることが出来る。いや、今のことばかりでなく、かつての記憶すら蘇らせることが出来るだろう。

ディオニュソス かつての記憶とは？

声 前世と言った方がいいだろうか。かつてザグレウスだった頃、やはり心臓としてゼウスに呑み込まれたお前は、その腹の中で何を見た？ 往時の記憶はゼウスによって封印されてしまったが、今ならば、それを思い出すことが出来るだろう。お前は何かを見たのではないか。

ディオニュソス 見た。見ました。あのとき……ゼウスの腹の中にいるはずなのに、ゼウスが私に近づいてきたんです。

ゼウス こんな風にか？

〔ゼウスが現れて、その掌にディオニュソスの心臓を乗せる〕

ディオニュソス 父上、あの時あなたは私に言いました。お前はもう一度生まれて蘇るだろうと。そして、ここでの体験は、いつかお前の本質が現れるときの予型となるだろう、と。

ゼウス いかにも。お前はザグレウスとして死に、セメレーの子ディオニュソスとして生まれなおした。つまり蘇った。そして今こそが、かつて私が予言した「お前の本質が現れるとき」である。ゆえに、かつての予型はここで「実物」となって現れることになるのだ。

ディオニュソス ですが、手足もない心臓となった私には、何ひとつ出来ることはありません。

声 それで構わない。お前は、ゼウスと私がすることを、ただ意識して見ていればいい。見て知ればいい。そうやって知ることこそが、お前を更新させる力となる。

ディオニュソス 分かりました。

声 ゼウスよ、では始めるとしよう。

ゼウス ええ。ですが私は、その前に名前を探さなければなりません。この心臓の名を。

声 心臓の名とな。

ゼウス そうです、この心臓の本質的な名前です。（心臓を眼前に掲げながら）心臓よ、神々〔ティターンたち〕でさえ、その存在を打ち消せなかった固き石よ。いな、存在しないがゆえにこそ、壊すことが出来ない固き石よ。さてお前の本質を何と呼ぼう。「無」では、あまりにも漠然としていて、お前の持ち味が逃げていってしまう。

声 ならば「虚無」と。

ゼウス ああ、そうか、虚無。虚ろな一点を指ししめす名前だ。まさしく虚無という名が相応しい。

〔ゼウスがそう言うのと、周囲の闇が一気に深まり暗黒となる〕

声 闇が深くなったということは、来たということだな。お前たちも、虚無という名が良いと思うだろう。

〔ふと見れば、三人の子供たちがゼウスの傍らにいる〕

子供たち 一人目 そうだね。

二人目 いい響きだね。

三人目 虚無がいいね。

ゼウス みんな迷わずに来られたんだな。アッティス、アドニス、パール。

声（子供たちに） また柱を立ててやろうな。

〔淡く光る柱が立ち、子供たちがその柱を囲む〕

子供たち 一人目 おじさんもおいで。

二人目 ゼウスおじさん。

三人目 さあ、ここに座って。

闇の真理の開示

さきに柱を囲んで座った、ディオニュソスと子供たちと同じような形式になる。もちろん今回は、さきにディオニュソスの席だったところが、ゼウスの席ということである。心臓は、そのゼウスの掌の上にある。

子供たち 一人目（ゼウスに） こうして柱があるでしょう。心を一つに重ね合わせるために、僕らは同じものを見るはずだった。

二人目 けど実際には、一人が見ている柱の、その側面と裏側しか、他の三人は見る事が出来なかったんだ。

三人目 これじゃあ本当の意味で「同じものを見る」とは言えないよね。

声 だから、こうして柱を細くしていった。そうだな。

「柱がどんどん細くなる」

子供たち 一人目 でも同じことだった。

二人目 糸のように柱を細くしていても、結局はね。

三人目 最後の最後まで、僕らは同じものを見ることは出来なかったんだ。

ゼウス では、これならばどうだろう。

「糸のようになっていた柱をゼウスがもぎ取る。そして、柱があった場所に、ディオニュソスの心臓を置く。心臓は瞬時に柱へと変容するが、すぐに細まり、さらに細まり、ついには目に見えなくなってしまふ」

ゼウス 虚無だ。

子供たち 一人目 アハ、これなら同じものを見ているね。

二人目 ほんと、前も裏も、右も左もみな一緒なもの。

三人目 僕たち、今度こそ、本当に心を重ね合わせることが出来たね。

子供たち 一人目 でも僕たち、いま何も見てないね。

二人目 だって前も裏も、右も左もないんだもの。

三人目 ということは、同じものを見るためには、見えないものを見るしかないのかな。

声 それが虚無の逆説〔パラドクス〕だ。

ゼウス（子供たちに）お前たちは、互いの心が一つに重なり合うことを望んでいたな。一つに融けあうのではなく、一つに重なり合うことを。

子供たち 一人目 だって、ここには母さん（大地母神）がいないんだもの。

二人目 だから融けた心を盛る器（面積、大地）もないってことでしょう。

三人目 器がないなら、重なり合って一つになるしかないもの。

声 そういうことだな。

ゼウス ところで、すべての存在は、その存在のうちに虚無を含んでいる。そう、虚無を含まぬ存在はなく、かつまた虚無に相違性はありえない。

声 ゆえに虚無こそは、すべての存在にとって唯一の、真実の共通点となる。

ゼウス したがって、虚無を見つけ出し、かつ自らをも虚無と成すならば、すべての物と心を、一つに重ね合わせる事が出来るのだ。

声 逆に言えばだ。すべて（あるいは複数）の人々、すべての心、すべての存在が真実に重なり合う一点を探し出せば、そこに「虚無」を見つける事が出来る。

ゼウス その一点を見つけ出すためにこそ、私たちはこうして、地下の底の底まで下降してきた。

子供たち 一人目 どうして地下でなければならぬの？

二人目 ここは、こんなにも寂しくて寒々しいところなんだよ。

三人目 一かけらの光も射さない暗いところなんだよ。

ゼウス だからこそだ。しょせん輝きは、闇の中からしか生まれられないのだよ。あまつさえ、それが創造の光という名の大光輝ならば、ことさらに深い闇をも欲する。まことにそれは「完全なる暗闇」を要するのだ。

子供たち 一人目 完全な暗闇？

二人目 それは光（存在）が全くないということ？

三人目 虚無ということ？

ゼウス そうだ。そして、その虚無を体现する者こそ、八つ裂きのザグレウスであり、ディオニュソスの心臓であり、いまは文字どおり無と消えてしまった、ディオニュロス自身なのだ。

子供たち 一人目 でも虚無は虚無でしかないでしょう。

二人目 消えてしまったんだもの。

三人目 話はそこでお終いでしよう。

声 それは違う。出現した虚無が、ふたたび「存在そのもの」と結びつくとき、あるいは「存在そのもの」をも包摂する「創造」に取り込まれるとき、虚無は「虚無からの存在の創造」となる。つまり「無からの創造」であり、それまさしく創造神の姿である。

ゼウス そして、創造神とは世界最高の神のことであり、ゆえにこの最高神ゼウスのことである。つまり虚無神ディオニュソスは私を構成する一部であり、しかも私にとって、何よりも大切な中心点なのだ。

子供たち 一人目 そういえば、ここはゼウスおじさんのお腹の中だよね。

二人目 そしてディオニュソスは、ここで虚無となって消えた。

三人目 じゃあ今、虚無は創造に包摂されて、その一部になってるんだ。

ゼウス そのとおりだ。

声 だから今こそ蘇れディオニュソス。すべてを暗闇の深淵まで引き込んで、それを虚無の一点から、新たに蘇らせる神よ。もっとも崇高な意味における「死と再生」の神よ。今こそ虚無が、お前の本質が、ゼウスの助けを借りて輝く時である。天地創造の光が輝く時である。

〔虚無化した柱（ディオニュソスの心臓）が、突如として強烈な光を放つ。ただしディオニュソスはゼウスに吞まれている状態なので、間断なくゼウスの腹、そしてゼウスの体全体が光りだす。その光は地下の暗闇をすべて光に変え、キュベレーの陰門をも貫き、ついにはキュベレー神殿の天窓を通して夜空まで届く〕

夜空

夜空を貫く天地創造の光は、それ自体がゼウスでありディオニュソスである。かの声の主はなかば実体を持ち、その実体によって光（ゼウス+ディオニュソス）を抑え込もうとしている。

声 おお、これでは光が強すぎる。放っておけば、このまま世界の終焉と再創造が行われてしまう。何より、このような熾烈な輝きには、ディオニュソスの心さえ耐えられぬであろう。よってゼウス、お前に命じる。ディオニュソスを今すぐ吐き出せ。創造と虚無を分離させるのだ。

〔ゼウスがディオニュソスを口から吐き出す。それによって俄然光が弱まる。なかば気を失っているディオニュソスを抱きながら、ゼウスが囁く〕

ゼウス 愛する息子よ。私から離れば単なる虚無となるお前に、今せめてもの贈り物をしよう。これは短い呪文だが、唱えれば、お前の虚無から、小さな創造の輝きを生むだろう。お前は自らの虚無を露わにしたとき、すかさずこう唱えるのだ。「ディオニュソス・ザグレウス・ゼウス」と。

〔そう言い、声の主にディオニュソスを託すと、ゼウスはオリュンポス山へと帰っていく。声の主は、い

まや確固たる実体を持っている。それは杖を持ちフードをかぶった老人の姿である。彼はその姿でディオニュソスを抱きながら中空を漂う」

ディオニュソス（意識を取り戻して） 父上は……ここは……私は……

声の主 ゼウスは去った。だが、お前はもう大丈夫だ。至高の権威を持っている天地創造の光が、お前の狂気を吹き飛ばしてしまったからな。

ディオニュソス それはどういう……

声の主 お前は、自らの本質の輝きによって、ヘラとティーシポネの呪いを打ち払ったのだ。今やお前に、己の悲しみを直視できぬような懦弱さはない。

ディオニュソス 僕の悲しみとは何ですか。

声の主 あの可哀そうないノーとアタマース、そして二人の子供たちの死を、今のお前ならば、ちゃんと受け止められるだろう。

〔ディオニュソス、一瞬悲しみに胸を突かれるような表情をするが、どうにかその表情を克服する〕

ディオニュソス はい……たしかに、悲しみに心を碎かれることはないようです。

声の主 それでよい。今日お前は、以前の正常なお前を取り戻したのだ。いや、ただ元に戻っただけではない。お前は今日、本来的な自分へと「成った」のだ。その証拠に、お前の体は成人のそれへと変化している。

ディオニュソス 本当だ。大人になってる。

声の主 神にとっては、肉体など、しょせん靈性の影に過ぎない。だから心が成ったならば、肉体もまた、それに合わせて成長するのだよ。

ディオニュソス これが今の僕……では、あなたは？

声の主 うむ。こうして空を漂っているのは落ち着かないな。どこか景色のよいところに降りて話そうか。

第11章

ヘルメス・トリスメギストス

登場人物

ディオニュソス いまや狂気から立ち直り、その姿も青年のそれへと変わっている。

声の主 前章において、暗闇のなかでディオニュソスを導いた声が、本章においては実体をもって登場することになる。その見た目は、杖を持ち、フードを被った老人の姿。彼は自らをヘルメス・トリスメギストスと名乗る。

ヘルメス・トリスメギストス 右で述べたごとく、声の主のこと。ヘルメスと区別するため、ここではトリスメギストスと表記する。このトリスメギストスとは「三倍も偉大な」という意味。つまり三倍も偉大なヘルメス。

ヘルメス デイオニュソスを助けてきた使者の神。しかし彼の正体は、ヘルメス・トリスメギストスの一部（触覚）であった。ただしヘルメス自身は、トリスメギストスのことを認識していない。

山の頂上

見晴らしのよい山頂。見上げれば星空が、見下ろせば海が一望できる。その海は、満月に照らされて明滅している。遠くにはキュベレー神殿も眺望できる。そんな山頂の大岩に座る、裸身のディオニュソスと声の主。

ディオニュソス あなたの名前は？

声の主 ヘルメス・トリスメギストス。

ディオニュソス 三倍も偉大な、ヘルメス？

〔声の主⇨ヘルメス・トリスメギストスが、顔の大部分を隠していたフードを頭から取り除く。ついで、そのフード付きのマントをも脱ぐ〕

ディオニュソス（驚愕して）ヘルメスじゃないか！ ……いや違う。暗くて分かりづらいけど、僕が知ってるヘルメスとは違う。ヘルメスをもっとずっと若い感じで……すごく似てるけど、やっぱり違う。

トリスメギストス（脱いだマントをディオニュソスに掛けてやりながら）当惑するのは無理もない。お前がよく知っているヘルメスは、実は、この私の一部であるのだ。

ディオニュソス あなたの一部ですって？

トリスメギストス そう。私は「創造」と「存在そのもの」と「虚無」という三つの位相を支配するがゆえに「三倍も偉大な」と贈り名されている。ところが、お前が知っているヘルメスは、その三つの位相のうち「存在そのもの」だけを知っている神に過ぎないのだ。つまりあいつは、私という本体の一部であり、さらに言えば、私が存在世界に伸ばしている「触覚のようなもの」に過ぎないのだ。

ディオニュソス ではあなたは？

トリスメギストス そうだな、全貌を明かすのは無理だが、このようになら言えなくもない。すなわち私は、世界の裏側で神々の歴史を導いている「隠れたる神」なのだ。したがって、隠れている私は、そう滅多には、こうして表舞台で自分の姿を見せることはない。

ディオニュソス そのような方が、私の前には現れたのだと。

トリスメギストス ああ。お前は世界の内側で生きる神ではなく、世界を端で構成する神だからな。それゆえ私に会い、かつその名を知る資格がある。

ディオニュソス それは一体……

トリスメギストス あ、いや、悪いが少しだけ待ってくれるか。

〔トリスメギストス、杖の先端を、自身の額に当てる仕種をする〕

トリスメギストス ここからはディオニュソスではなく、このミュトス（物語）を呼んでいる貴殿に話しかけるとしよう。私の類まれな霊力は、一般に「読者」と呼ばれている貴殿にさえ、直接干渉することが出来るのだ。

ディオニュソス どうしたのです。何をブツブツ仰っているのです。

トリスメギストス（読者に）何を隠そう、私がこれからディオニュソスに話そうとしているのは、高純度に神学的な内容なのである。つまりミュトス（物語）ではなく、もっぱらロゴス（論理）に属することなのだ。よってその内容は、純粋にミュトスである本書には、幾分かそぐわれないことになる。

「トリスメギストス、まだ何か言っておこうとするディオニュソスを片手で制する」

トリスメギストス（読者に）そこで私は、いっそのこと、これ以降の論述はキッパリと省略し、別の機会、別の紙面に、その発表の場を移したいと思っている。それについては、このミュトスの著述者もまた、快く承諾してくれるだろうと考える。

著者　そういうことであれば、もちろん承りましょう。では申しつけどおり、ここでいちど物語を中断することにします。

トリスメギストス（読者に）申し訳ないが、そういうことになる。では。

教示を終えて

ディオニュソスに対する、ヘルメス・トリスメギストスの教示が終了する。それは神々の歴史に関する、かなり長く哲学的な論述だった。

ディオニュソス　……となれば、私は何をすればいいのでしょうか。

トリスメギストス　思うとおりに生きるがいい。己の本質に目覚めた者に、他者が道を教える必要はない。もっとも、どのみちお前は、お前の祭のなかで「破壊と虚無と創造」を体現することしか出来まいがな。

ディオニュソス　破壊、虚無、創造……

トリスメギストス　私ももう去ろう。伝えるべきことは伝えたのだ。あとはお前が「存在の神」であるアポロンと邂逅する日を、楽しみに待っていることにしよう。では、さらばだ。

「そう言ってトリスメギストスは、いったん俯く。そうしてからもう一度顔を上げると、その時には、す

でにヘルメスへの人格交代が済まされている」

ヘルメス（ハツとして） どうしたんだ？ デイオニュロスじゃないか。

デイオニュロス ヘルメス……僕が知ってるヘルメス。

ヘルメス ここはどこなんだい。ここで私は、いったい何を。

デイオニュロス（独白） 説明しなくてもいいよね、ヘルメス・トリスメギストス。（ヘルメスに） 悪いけどヘルメス、僕を運んでくれないかな。あのキュベレー神殿までさ。

ヘルメス キュベレー神殿まで運べだって？ ああ、あそこか。でもデイオニュロス、なんだか随分と重そうになってるじゃないか。こりゃ抱いて飛べるかな。

デイオニュロス なんか調子が狂うな。でも、ま、いいから頑張ってよ。あそこに会うべき人たちがいるんだ。

第12章
曙光

登場人物

シレノス 老いた半獣神。かつてはザグレウスの子守役、世話係であったが、現在はキュベレー神殿の従僕を務めている。

ディオニュソス 我らが主人公は、いまや晴れ晴れとした好青年の姿である。

キュベレー フリギュアの大地母神。本章では、ふたたび声だけの出演。

ヘルメス 使者の神。ヘルメス・トリスメギストスの人格の一部。

ヘルメス・トリスメギストス トリスメギストスと表記。オリュンポスの神々を超える至高の神。終盤、ヘルメスと人格を交代することになる。

モルティ マイナスの一人。

四人のマイナスたち キュベレーに仕える巫女としてのマイナスは、総勢で二十人ほどいる。今回、その中から四人がディオニュソスに譲渡されることになる。すなわち、モルティ、フィカー、ニグ、レドの四人。

キュベレーの神殿

暁闇の時間帯、神殿のホールには春の景色が広がっている。暗いホール内を松明で照らしている状態なので、色彩は鈍い。だが確かに、そこには花咲く草原が広がっており、また何本ものブドウの木が生い茂っている。そのブドウの木の下で眠っている男女がいるが、祭儀の当初と比べれば、その人影は、かなりまばらである。眠っている者は、例外なく酔いのまどろみの中にある。正気を保っているのは、シレノスとマイナスたちのみ。そこにディオニュソスとヘルメスが訪れる。

シレノス（ディオニュソスを見て）……ザグレウスさま……ですか？

ヘルメス（ディオニュソスに）ハハ、急に君が大きくなってしまったものだから、彼も混乱してしまっている。ほら、君から何か言ってみてやりたまえ。

ディオニュソス ああ、私だよシレノス。久しぶりだな。

シレノス おお、ザグレウスさま……あ、あれ、久しぶり？　ということは思い出されたんですか、生まれ変わる前のことを。

ディオニュソス ああ、そうだ。

シレノス うれしい。うれしゅうございます、ザグレウスさま。こんな幸せなことはありません。

ディオニュソス 本当にすべてを思い出したのだよ。お前やアテナ姉さんのこと。ゼウスに呑み込まれたときのこと。またティターンどものこともな。まあ考えられるかぎり最悪の思い出し方だったが。

シレノス とは？

ディオニュソス もう一度奴らに喰われた。

シレノス ……

ディオニュソス そんな顔をするなシレノス。そのおかげで私は、自分自身の本質に目覚めることが出来たのだ。その証拠こそが、この成人した肉体。そして、この体には、傷など一つもない。

シレノス はい。美しい姿です。

ヘルメス 私もハンサムなほうだと思うのだが、ディオニュソスには負けるかな。

シレノス フツ、比べるまでもない。どなたか知りませんが僭越ですぞ。

ディオニュソス 僭越なのはお前だ。この方はヘルメスだぞ。

シレノス 十二神の！　あ、あわ、あわわ。

ヘルメス（気にせず）そういえば、このホールも随分キレイだな。

シレノス ああ……でございましょう。ですが、最初からこうだった訳ではございません。

ヘルメス というど？

シレノス うーん、もしかしたら一種の出産なんでしょうかね。まず急に、キュベレーさまの陰門から光が放たれたんです。これをして「光が産まれた」と言えなくもないでしょう？ それはもう鮮烈な光で、その激しさに驚いた信者たちが大勢逃げだしました。

ディオニュソス ……

シレノス とにかく、その直後ですよ。ヘルメスさま、ディオニュソスさま。ここがこんなにキレイな花園になってしまったのは。もちろん、私も一瞬、光に目が眩んでしまったんですが、その目が元に戻った時には、すでにこの春の景色が出来上がってしまっていたんです。

ヘルメス ほう。

シレノス しかも、この景色は幻覚でも幻影でもないんですよ。手を伸ばせば、しっかりと触れられるんです。

ヘルメス まだ初冬だから、ずいぶんと季節を先取りしたんだな。

キュベレー（ホールに響く声として）そう、ここにはまさしく春があります。なぜなら、地下の男神であるディオニュソスと、大地の女神である私が、切っても切れない関係にあるからです。

ディオニュソス キュベレーさま。

キュベレー ディオニュソスよ、よくお聞きなさい。地下におけるあなたの虚無は、大地に伝わって冬の寒さとなり、あなたの創造は、大地に伝わって春の萌（もえみ）となる。あなたが「虚無からの存在の蘇り」ならば、私は「冬からの春の蘇り」なのです。

ディオニュソス 私とあなたとの絆は、相当に強いものなのです。

キュベレー ええ。事実この二つの蘇りは、互いに浸透するように結びついています。ですからやがては、多くの者たちにとって、一つのものと思えなくなるでしょう。

ディオニュソス 偉大なる女神よ、私はあなたの声も姿も覚えています。あなた様は、私を正気に導い

てくださった。ありがとうございます。

キュベレー 私は門。あなたを地下世界に送り出すための門に過ぎません。あなたを実際に導いたのは、飽くまでもあの至高の御方。私はその名前を存じておりませんが。

ヘルメス（ディオニュソスに）至高の御方というのはゼウスのことかね。

ディオニュソス いや違う。……あなたに違うと言うのも変な感じですけど。

ヘルメス ん？

キュベレー いずれにしても、あの御方に導かれたあなたは、地下で自己の本質を知ったのですね。そして、その本質の輝きによって、あの狂気と怯えとを打ち払った、と。今のあなたからは、己の苦悩を直視し、そこから逃げ出さないだけの心の強さを感じます。

ヘルメス そういえば、大きくなったのは体ばかりじゃない気がするな。

シレノス それは私も感じていました。

ディオニュソス 迷いがなくなったのは事実です。いま私は、自分が何者であるかを知っており、また自分が何をすべき者であるかを知っています。

キュベレー そのように言えるのなら、間違いなくあなたは、今日あなたとして出来上がったのです。堂々と「成った」のです。

ヘルメス なら、ぜひ聞きたいね。君は何者かね？ 何をすべき者かね？

ディオニュソス 私は虚無の神。存在の破壊を招き、その破壊の極みである虚無の一点から、創造の蘇りを導く者。

ヘルメス ……そんな神がいるのか？

ディオニュソス 私はこれまで生まれることのなかった、新しい神なのです。

シレノス わしは、そんな神の子守りをしたのか。

ディオニュソス ああ、お前とアテナ姉さんには、心から感謝している。

シレノス め、めっそうもない。

キュベレー デイオニュソス、あなたの完成を心から祝福します。そして、そのお祝いとして、私から四人のマイナスたちを贈りましょう。ニグ、レド、モルティ、フィカー、こちらに来なさい。

シレノス お、モルティもか。

キュベレー 彼女たちは、本来は私キュベレーの巫女たちです。ですが、私の祭儀とあなたの祭は、分かちがたいほど一つに結びついているもの。

ディオニュソス ええ。

キュベレー 私の祭儀は、あなたの祭の門。男たちは、キュベレーの祭儀を通して、初めてディオニュソスの祭にたどり着きます。ですからあなたには、どうしても「キュベレーの祭儀」を取り仕切る者が必要となるのです。

ディオニュソス それを彼女たちが行うのですね。

シレノス わしも手伝いますぞ。

キュベレー そしてまた、マイナスたちの美しさは男たちを引き寄せ、その男たちは女たちを引き寄せ、祭は際限なく大きくなっていくでしょう。そして、その祭の中心にはディオニュソス、常にあなたがいる。大ディオニシア祭です。

ディオニュソス 大ディオニシア祭……

キュベレー 人々はブドウ酒に酩酊しながら異性と交わり、「誰でもいい」がゆえに、自身「誰でもない者」となっていく。そして、そうした誰でもない者たちが、完全に混在して一つになってしまふ。そこまでは私の祭。

ヘルメス（トリスメギストスの人格が宿る）お前は、激しい音楽と踊りによって、「誰でもない者」を、さらに「単なる衝動そのもの」となるように煽っていくだろう。

ディオニュソス あなたは……

トリスメギストス 彼らは自分自身についてこう言うかもしれない、「私がない」と。あるいは「誰もいない」と。そして、その人間としての存在感を完全に失うほど純粹になった「衝動そのもの」が、ためらいのない破壊と、さらにその破壊の先にある「虚無」へと、彼らを到達させることになる。

ディオニュソス そして、その虚無がついに「虚無からの創造」を生む。それが私の祭である大ディオニシア祭。

キュベレー そう、大いなる蘇りの祭。

トリスメギストス 死と再生、死と復活の祭。

キュベレー（ディオニュソスに）あなたは、この祭を広めることに身命を尽くしますか。

ディオニュソス もちろん、喜んで。

キュベレー たとえ祭の意義を理解しない者たちから、迫害を受けることがあったとしても？

ディオニュソス 覚悟の上です。

キュベレー そう……ではお行きなさい。もうすぐ陽が昇ります。夜の暗闇が暁を生みだすこの時に、虚無の暗闇から創造の光を輝かせるあなたはお行きなさい。それは旅立ちに相応しい時です。

〔ホール内で繁茂しているブドウの蔓木から、蔓が一本伸びる。それがディオニュソスの額に絡みついて冠となる〕

トリスメギストス 葡萄酒の神、虚無の神、蘇りの神、幾重にも名誉に包まれた神の、今こそ始発の時だ。

ディオニュソス では行こう。マイナスたち、シレノス。私の祭を広めるために。

〔扉から差しこむ曙光を浴びつつ、ディオニュソスの一行がホールから出ていく〕

戯曲 デイオニューソス 闇の神性 III

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
